

可愛いココットと魔法の機関車 ＜黄金号＞ リメイク版

cocoratte

可愛いココット

「不思議な夢を見たの」

「夢？」

「わたしの体の傷も、心の傷も癒されていく夢を」

ココットが目覚めたとき、その場所は、いつも通りの朝。でもなにかしら。あたしはこれまでとは違うような気がするわ。とココットさんは思う。ココットさんは、手洗い桶で裏庭の井戸から水を汲むと、ぱしゃぱしゃと顔を洗って、麻布のタオルを手に持ったまま、鏡を見た。いつも通りの丸い顔。亜麻色の髪。茶色に近い金の瞳。いつもどおりのわたし。いつも通りの自分。

町は淡い朝の光に包まれている。そうここは、シルマリルの町よ。汽車の案内をするのが私の仕事。そして、わたしがいつも通りに裏庭へと行く。と、"それ"があらわれた。

とても大きな赤錆色の大きな人ほどの物体で、とても長い筒上の、機関車と客車だわ。ここ、シルマリルの町に保存されている、最初に作られた、魔法で動く機関車。〈黄金〉号。それがわたしの家の前に？ どうやって動いているのかしら？ 誰もいないのに？ いいえ、猫がいるけれど。駅員の服を着た猫だ。あたしは、それを見て、猛然とダッシュ。家から飛び出すと、動き始めた機関車のあとを追う。「待って」 汽車は止まった。

「お嬢さん。待ってました。汽車の旅へようこそ」と直立歩行した猫がいった。ここはシルマリルの町。魔法が使える町。でもあたしは平凡な人間で。あたしは、でも。「あたしは……あたしは……」「ココットは。ココットは、可愛い女の子。君は、可愛い女の子だから、選ばれたんだよ」「なにに？」「汽車の旅に」「汽車の旅？」あたしは聞き返す。「夜の言葉を集める旅さ」「夜の言葉？」「そうさ。世界には不思議なものが、あるんだ。それは夜の言葉というんだ」「それは、なんのためにあるの？」「誰かを慰めたり、誰かを助けたりすること」

それは歩いて職場に向かう公園にある、おんぼろの機関車の黄金号。でもそれは新品のように新しい。たぶん、あたしが望んでいたものは、きっと、魔法のようにすてきなこと。あたしは決意する。「さあ行きましょう。黄金号！ あなたのお名前は？」とあたしは小さな機関車の後ろの

機関室に乗り込むと、猫さんに告げた。猫たちが、魔法石を機関車に積み込んでいる。「ぼく？
ぼくの名はココットというんだ」「あたしと同じ名前ね」「そうだよ。だってぼくは君が名付けたんだから」「あたしが？」「さあココット。出発だよ」猫のココットがレバーを押すと、汽車が再び加速していく。ネグリジュのままだ。ちゃんと着替えてくれば、よかったなあ。「じゃあ、客車で待ってるね」とあたし。と客車には、あたしの一張羅をつめた、旅行用のトランクが。なぜあるのかしら？と疑問を感じる前に、あたしは着替えている。赤いドレスズボンに茶色のワンピース。金の瞳が窓ガラスに写った。通常の列車の軌道だ。いつもの道だけど、そこに小さな機関車に牽引された、小さな一両の客車が走っている。みんな目を丸くしている。

「あれはなんだい。ココットじゃないか」夜が明けた朝。あたしの機関車はシルマリルの町を爆走している。不思議と怖くなかった。不思議と嫌じゃなかった。なぜなんだろう？あたしは町のみんなに手を振ると、胸を張って、かぼちゃの馬車のような、座席に座る。あたしはココット。町で一番駄目で、でも町で一番すてきな女の子。旅行鞆のしたには、着替えやお弁当のほかに、日記帳が入っていた。それを使って、夜の言葉を書き留めるのね。とあたしは思った。日記にはなにも書かれていない。あたしは日記を書くか迷う。と、列車が隣町のあいだの、セレナデの森に入った。あたしは客車から、機関車に身を乗り出すと、猫のココットに、いった。

「ねえ、たぶん、この方角だと、隣町のセレナデに行くのよね」「そうだよ。でもその前に、君に会いたがっている人がいるんだ」「あたしに？」そして、機関車はセレナデの森にある、屋敷に到着した。そこは豪奢なお屋敷。でも寂しそうな雰囲気。暗い森。

「ここで降りるのね」「そうだよ」と猫のココット。「ねえ、あなたはついてきてくれないの？」「これは君の冒険でもあるんだ。だから、ぼくはここで待っているよ」「うん待っていてね……」あたしはおそろおそろ、そのお屋敷に向かう。「誰かいますか？」門のそばであたしは閉ざされた門を見る。「ええ、いるわよ」と一人の大人に近い少女があたしにいう。ちびペチャのあたしよりも断然大人。「こんにちわ。ココットさん」「こんにちわ。あなたがあたしに会いたがっていた人なの？」「そうよ。嬉しいわ。ココット」あたしはその人の案内で、応接室に招き入れられた。「わあ、本がびっしり」「ココット。あたしがあなたを呼んだのは、あたしはあなたの物語のファンだからなの」「ファン？」あたしは小説家でもなんでもない。その少女はミシアといった。歌を歌う歌手をしているらしい。「たしかにあたしの名前だ」とあたしはミシアが手に持った、その本を見る。G・H・ココット。あたしの名だ。でもその本は、あたしには読めない文字で書かれていた。「そう。だからあなたに歌を聴いてほしかったの」「歌？」「そう」はるけきかんばせよ
とミシアは歌い始めた

君の名は古き時の終わりを告げる

愛しい人

愛しい人

愛を知るとき

愛を知るとき

はるけき野原に虹がでるだろう

夜の言葉を集める野原に

虹がでるだろう

「これが夜の言葉……」とあたしは感じた。心地よく満たされていく。あたしの願望も。望みも。「さあ、あたしが歌った言葉を、「日記帳」に書いてちょうだい」「え」「どうしたの？」と心配そうにミシアの顔が曇る。「ごめん！ 日記帳を忘れてきちゃった」「そうね。あなたの物語は些細なミスでいっぱい。でも落ち込まないでね」「なんで」とあたしはミシアにいう。ミシアの、とても大切な言葉。それを掴みそこなってしまった。「あたし、日記帳をとってくる！」あたしは駆けだした。でも客車に戻って、日記帳を書こうとしても、夜の言葉は描けない。暗いセイレデの森にある館のそばに停められた客車で途方に暮れるあたし。そこにミシアがやってきた。「時がくれば、思い出せるでしょう」とミシア。「もう一度歌ってくれない？」ミシアは首を振った。「セイレデの町に行けば、夜の言葉を使えるものがあるはずですよ。あなたの前で、きっと誰かが歌ってくれるはず」誰なんだろう？「じゃあ、セイレデの町に行くね。ごめんね。ちょっとしか会えなくて」「ううん。何十年も待ったんですもの。可愛いココット、あなたに会えて、嬉しいわ」「そうね。また会えるといいわね」そしてあたしたちは別れると、セイレデの町に入った。そのあとゆっくりと黄金号は森の小道を進んでいく。

「ずいぶんとこの汽車はゆっくりだね」とあたしは機関室でいう。「魔法石が切れかけだからね」「そう」とあたしは客車に戻ると、荷物が増えてる？毛布？「って誰なのよー！」とあたしはがばあっと毛布をはいだ。「……むにゃむにゃ。すまない。わたしは剣使いだ。君がセイレデの町に行くとき聞いて乗り込んだのだ」と少女がいった、栗色の髪に、茶色に近い深い青の瞳。ミニのスカートに、剣をまとっている。あたしとおなじ年ぐらいの女の子。「あなた、誰」「わたしはミリアム。M・ミリアムだ」がたんと汽車が止まった。黄金号が。「どうしたの？」「魔法石が切れちゃったみたい」と猫のココット。猫たちが魔法機関に魔法石をくべている。「ど

うやら魔法石があわないようだな」とミリアム。「どうすればいいの?」「近くの鉱山に魔法石を産出する廃坑がある。そこならば、魔法石を採取できるはずだ」「う、うん」「じゃあ、ココットいってきて」と猫のココットがつげる。「もう……」やれやれとため息をつくあたし。「わたしが案内する」と剣使いの少女が告げる。「どうして?」「わたしは森の一族出身のものでな。この土地には詳しい」「大丈夫だよ。ココット。ミリアムは君の味方だよ」「うん。じゃあ、案内させてね」「わかった」ミリアムは剣をもつと、薄暗い森を案内する。やがて開けた場所にでた。日の光が射し込む。そこに洞窟があった。鉱山のようなようだ。「わたしがきみを守る。ココット」「守るって……きゃ!」「モンスターだ」蛇のような化け物。「魔法石をとるとさっさと逃げるぞ」あたしは旅行鞆を手にもつと坑道へと入っていった。ミリアムが石を投げると化け物が怯む。「ココット、行くぞ」それからトラップをくぐったり、モンスターと棒きれで戦ったりしながら、あたしたちは、魔法石を手に入れた。「これが魔法石」きらきらした石だ。「じゃあ帰ろうか」あたしたちが帰ってきたとき、黄金号は夕暮れに輝いていた。「これなら、機関車を動かせるよ」と猫のココットがいう。にゃーにゃーと猫の機関士たちが鳴く。その夜遅く、あたしたちはミリアムといっしょにセレナデの町に着いた。

魔法列車というものは、自力で動く、機関車のことをいう。あたしとミリアム、猫のココットと猫たちは、旅行鞆に入っていた、ツナのサンドイッチを食べた。セレナデの町で、あたしたちはお風呂に入ると、宿屋で、寝ることにした。「じゃあ、ここねー」と見張りの猫を残して、あたしたちは宿屋に泊まる。あたしが宿屋に入ったとき、隅っこで動くものがあった。「誰だ」とミリアムがいうと、バスタブのカーテンから現れたのは、裸の少年!? あたしとと同じぐらいの年だ。「って誰だよ。お前ら!?!」少年があわてている。「いったいどういうことなの!?!」「ダブルブッキング……?」「二重の予約ね」「やれやれ大変ですよにゃあ」と猫のココットが猫座りで告げた。そのあと。「いい。ここはあたしたちレディの大切な宿なのよ!」「っておまえたちが勝手に!」と服を着た少年があたしに言い返す。あたしたちが言い争っていると。「た、大変ですよにゃあ」と猫の機関士がよろよろと入ってくる。「なんなの?」「黄金号が盗まれたんですよにゃあ」それを聞くと、ミリアムが飛び出していく。

宿屋の目の前には機関車に乗った、怪しいふたり連れの男女! ゆっくりと機関車が走っていく。あたしたちが泊まっている宿屋のある通りを。猫たちがスパナや棒きれを手にも二人連れの泥棒に立ち向かっているけれど、リーチとかの差がありすぎる。あたしは走っている。まだ機関車は全速じゃない。走れば追いつける。そして、ゆっくりと速力をあげる、機関車の後部座席につかまったあたしに、すでに機関車に飛び乗っていた、ミリアムが泥棒に銃で撃たれるのが、見えた! ミリアムがあたしのまえで倒れる。あたしの手が、機関車の後ろの鉄格子をにぎったまま、ゆっくりと速度をあげて、人が走る速度から自転車が走る速度に変わっていく。あたしをひきずったまま。交差点で、列車が急旋回して、あたしの手を振り切ろうとする。あたしの目の高さ、目の前には倒れたミリアムの姿がある。とそこに、どすんと音がして、街の建物の上から、誰かが、

そう、あたしたちとダブルブッキングしていた、あの少年が、目の前で銃を構える、泥棒のうち、一人の女性の方にふってきた！ さらに猫の機関士さんたちが奇襲とともに、落ちてきていた。「形勢逆転だわ」とあたし。少年たちの重さで減速した機関車のそばを、泥棒の銃があたしの横を落下して、落ちていく。気絶した女性。男と少年が向き合う。機関車は猫の機関士によって、とまっていく。振り切られた、あたしが立ち上がると、また黄金号を追って、よろよろと走る。とまった機関車の外側の機関室で、少年と男のタイマン。圧倒的に少年が強い。でも後ろから気絶から立ち直った女の人が、ムチのようなもので、少年を締め付ける。と、そこに立ち直った男が、少年をボディブローする。うめく少年。あたしはとっさに後ろに駆け出すと、後方10メートルのところに落ちていた銃を手を取った。そこで、あたしは銃を手を取ったまま、でも使い方がわからない……。と泥棒の男女にむかって、「動かないで」とさげふ。羽交い締めになされて、苦しそうな少年、停車した汽車。血を流して、倒れたミリアム。二人組の男女とあたしの対立。怖いけれど……。怖いけれど、守らなくちゃ！ 「二人を離しなさい！」 フランクな感じで、泥棒の女性が話してきた。「ハローお嬢さんあたしが撃てるかな？」 あたしが銃端を開こうとした瞬間、女の人のおチがしゅっと、あたしの銃と腕に絡み着いた。「形勢逆転...ってね。ゼロワン、エンジンに点火しな」と部下らしき男にいう。「アイアイサー」この人は.....あたしをこのままひき殺すつもりだ。その瞬間ぞっとする恐怖を感じた。こいつらはプロだ。「って動かないですよ！ 姉御！」 「どうやら機関車は壊れたみたいね.....」と道の真ん中にとまっている、わたしたちのまわりに人が集まってくる。「ふん.....お宝をもらい損ねたか。こいつらを離しな。引き上げるぞ」と煙幕が！ 「あたしの銃は返させてもらおうよ」とムチがあたしを転倒させると、銃がするりと抜けておく感触。倒れたミリアム。気絶した猫たち。そして、うめいている少年。あたしも傷だらけだ。「ミリアム！ みんな大丈夫！？」「俺は大丈夫だ」と少年。「ミリアムが！」「この子の名前か？ 全くヒドい災難だな」「そうね」「わー黄金号が大変なことにな」と猫のココットがようやくやってくる。ミリアムが運ばれていく。息はあるようだ。「ココット、遅いよ」とあたしは猫のココットたちにいう。「だって、君はすごいスピードだったんだよ」そして、あたしは、ふらふらと倒れた。「ちょっと休ませて.....」

そのあと、数日をあたしは休憩と、機関車と客車の修理に当てた。ミリアムの回復は早かった。しかし病室から動けないでいる。あたしとあの馬鹿、少年のルシアとは仲良くなった。「俺は歌い手なんだ」「嘘。あんなに強かったのに！」「喧嘩には慣れていてね」とルシア。「じゃあ、夜の言葉のことも知ってる？」「なんだいそりゃ」とルシア。「あたしが探しているもの」「ふーむ」「おれは歌を歌うものなんだ。君のために歌を歌うよ」

月影とともに流れゆく 西楼は
アルファンスのいと高き時の門
その地に君がいるだろう

その地に君がいるだろう

「俺も誰かを探しているんだ」「これは夜の言葉ね」日記帳が手元にあったので、それを書き留める。でもこれは単なる文字。ミシアのような強い高揚感はない。ミシアとまた会えるのかしら？「やーやー二人とも。黄金号が治ったよ」と猫のココット。「もう……いいところだったのに」「ざっと見たが問題ないようだ」とミリアム。包帯姿が痛々しい。「アルファンス……か。聞いたことがある」とミリアムがいう。しかし。「いてて、わき腹の傷が痛む」と苦しそう。「殺傷用の空気銃みたいだったな。ふむ、だが傷は深くない」とミリアム。「ミリアム……もう心配させないで……」とあたし。「それよりもアルファンスがどこにあるのか知っているのか？」「古い都だよ。ここから西にある」「聞いたことないわ」とわたし。「森の民しか知らされておらぬ土地なのだ」「そうなのか？ここで俺は歌を捧げなくちゃならない」「なんで？」とあたしはタオルでミリアムの顔を拭きながら、いう。「俺は歌うものだから」答えになっていないような気がするが、それはあたしも同じだと思う。人は、人には言えないことがあるのだとあたしは思った。

「アルファンスは黄金号なら行けるよ」謎の多い森の民。その都がアルファンス。そしてあたしたちは、その次の週に、セイレナから旅立った。魔法列車は新品同然。客車には猫のココットと、女の子剣士のミリアム、それにアルファンスを求めて旅をする、少年のルシア。それにあたしこと、ココット。魔法列車はふつうの道も走れるけれど、レールも走ることができる。谷間の道だ。「落ちたら命がないわね」とあたしはしたの川を見ながら、いう。さっきから黄金号はレール上を走っている。「あれ見て！」ルシアが谷間の向こう側を指さす。対岸を、追跡する列車。装甲車のような小型車両だ。魔法の機関車ではなく、通常の機関車。通常軌道でしか、走れないエンジン機関のようだ。振動と火薬の煙「伏せて」とあたしがいう。後方で爆発。ばらばらと岩が砕ける。「大変大変、加速して！」と猫のココット。「剣はつかえぬようだな」とミリアム。「俺の拳も駄目か」とルシア。と左右のレールで100メートルほどの距離がある、谷間が急激に開けた。空がぱあっと広がっていく。崖に設けられたレールの相対的な距離が開いていく。しかも左右の地形は、均一ではない。左右の谷間の地形、つまりレールの曲率の関係で、曲率の小さい、こちらのほうが、速度が速く、しかも前進に必要な速度は少ない。そのため敵車両は後方に遠ざかる。照準が狂い始めたのか、敵車両は砲撃を中止している。さらにカーブによって、スピードも落とし始めたようだ。「このまま10キロほど進むと森に入る。そこには秘密のポイントがある。それがアルファンスへの道だ」とミリアム。「なんとかなりそうね……って」前方からさっきの機関車が！？違うわ。別の列車みたい。ふつうの人たちが乗っている。猛突進するわたしたちに向かって、客車の後部のステップから、乗務員が手を振って、なにか叫んでいる。「停止停止！」とあたしたち。前に投げ出されながら、ぎりぎり衝突しない。こちらの谷間の左側の線路と右側の線路は一方通行になっている。それぞれのレールで、同じ向きに進んでいるため、こちらでも速度を落とせば、正面衝突はしないのだが……。前方の列車は速度が遅い。と谷間がまた狭くなり、敵車両が追いついてきた。速度を落としている。砲門をこちらに向けている。ライトを使った点滅信号だ。兵士のような人たちが乗っている。覆面を

している。「停車し、黄金号を明け渡せ。ですって」と猫の機関士さんたちからあたしたちはそれを聞く。まだあたしたちは走り続けている。ゆっくりした速度で。「どうすればいいの」いったいどうして黄金号がほしいの？このまえの二人組の仲間かしら……。 「ねえねえみんな」と猫のココット。床下から出したのは、ラッパ銃だ。「玉は二発しかないよ。一撃で運行不能にできる人いる？」と猫のココット。「わたしも経験はないが、弓矢なら扱ったことがある」一番戦闘センスが高い人はミリアムだろう。あたしたちは停車した。敵はこちらに砲撃してこない。油断しきっているのかも。敵車両が停車すると同時に、ミリアムが客車の視界の陰から飛び出すと、大きなラッパ銃を軽々と扱った。ずどん！とわたしの隣でラッパ銃が響いた。外れた。白いハンカチを窓から振っていたあたしはさっと客車に隠れる。魔法機関に蒸気が入って、白い白煙。と同時に加速！ずどん！ミリアムのラッパ銃が火を噴く。牽制のためだろう。それが命中した！小型の装甲車のような谷間をはさんで、50メートルほどの、相手側の機関車が揺れて、敵からの弾道が一瞬反れる。あたしたちの前方からはすでに客車は走り去っている。「加速するよー」と猫のココット。魔法機関がすごいなあって思うのは、前方の列車を追い越してしまうときの方法だ。なんと前方の車両を加速によって飛び越えてしまったのだ。そのまま空を浮かぶ。「わー落ちるー」とわたしたち。「すこしの間なら黄金号は空を飛べるんだよ」と猫のココット。たしかにそのまま空を浮かんでいる……。 「では森のゲートを開けましょう」とミリアム。「あなた……怖い？」とわたしはルシアにいう。「俺高いところが苦手なんだ」「前は屋上から飛び降りたくせに」「ふわふわ～ってしたものが苦手だー」「じゃあわたしも苦手なのね？」「なんで？」「なんでもない！バカ！」とまあこういったわけで、わたしはネスの森に着陸すると、アルファンスの都を目指した。

ココットさんたちは森に敷かれた、レールを進んでいる。うっそうとした高い木々の森だ。ここが森の一族の都、アルファンス。とあたしこと、元シルマリルの町の、機関車の案内人のココットはいう。ルシアの黒い髪、黒い瞳が水面に発射する。森の中の湖のそばの道を走っている。「ちょうどお昼の時間ね」とあたし。時計を見ていう。「いやアルファンスではつねに夕暮れなのだ」とミリアム。「なんで？ミリアム」「外部のものから身を守るために、時を止めているのだ。わたしはそれが嫌で飛び出してきたのだよ」「なるほど」神出鬼没とされる、森の民の秘密の場所だろう。そういえば、ミリアムもルシアも謎が多い。ルシアは過去のことを語らない。なんでも北の町の歌い手らしいけれど。「ミリアムさまよ」と声があがった。町の人。あたしたち、走ってくる黄金号に道を譲る。「ミリアムさまが帰ってきたぞ」木々の中に、豪奢で繊細な木と石でできた家屋がある。森の家だ。でも森と溶け合っているみたいその通りを、黄金号は走ると、やがて森の広場に機関車は停車する。「ミリアム様？」とルシア。って余計なことをいっちゃって。「わたしは森の国の姫、メイヴ・ミリアーナだ」なんでも森の国の言葉は立場によって、名前が変わるらしい。と聞いている。「ミリアム。お姫様だったの！？」とあたし。ミリアムはそれには答えず、ミニのスカートを翻して、おさめた剣を鞘に、黄金号の後部に牽引されている、客車から降りた。そして、ミリアムは歌い出す。

ココット 我が友よ
その通り
君の疑問に答えよう
わたしは一度故郷を捨てた身
けれど 君の助けで
我が故郷へ
帰ったのだ
私の愛おしき故郷へ

「これは夜の言葉」ココットは思った。わたしはそれを忘れない。ミシアのときは現実じゃない気がしたけれど、ミリアムの歌は現実の歌だ。森の一族の都の、不思議な時間でも、わたしはそれを不思議に思わない黄金号の周りに集まる人たち。ミリアムが降りたあとに、歌い手のルシアもわたしも猫のココットも猫の機関士たちも黄金号を、降りていく。猫のココットが歌いだした。わたしの馬車は魔法の機関車<黄金号>わたしたちがお姫様をお連れしました。猫の機関士たちがにゃーにゃーと鳴く。群衆が答える。お姫様を？幾多の拳と拳をふるわせる。冒険の果てに俺たちは大切な女性をお守りいたしましたルシアに続いて、わたしも歌い出すわたしたちはお姫様をわたしたちの大切なお友達をお連れしました時を知るもの時の都 黄昏の都 森の都へようこそ一人の老人が歩み寄ってきた。それはゆったりしたローブを身にまとっている。「俺はここで歌を歌うために。大切な友達のために歌を歌うために、ここにやってきたんだな」とルシアがいった。「そうね。ルシア、よかったわね」あたしのために歌を歌ってくれないの？ルシア。わたしは日記帳に夜の言葉を書いた。わたしたちはその後、宮廷の静かな、庭園に招かれた。「もぐもぐ。この肉うまいな」「タルタル肉の照り焼きです」と給司の女性がルシアに料理内容を説明する。とそこに。綺麗に着飾ったミリアムが。わたしたちも着替えている。わたしは着替えの赤のズボンドレスにピンクのミニの袖のワンピースだ。風が涼しい。しかも、森の空気のいい香り。わたしもお料理を食べてみる。「美味しい！ このお肉とても美味しいわ！」「だろ？」とルシア。「うんうん。ホントね」「さて、ココット。君はいかねばならぬ」と正装に着替えた、ミリアムが一人のハーブを携えた、男性といっしょに近づいてきた。「どこに？」「夜の言葉を集める旅に」夜の言葉とは我々を夜の帳へと導くアルオッホアルオッホ古き夜の帳へと「ココット、ルシア。君に紹介したい人がいる」それはすらりとした若君のよう。金子織りの春織物の着物に、えびらをまとい、蒼い瞳、蒼い髪。若い男のようだが、大きなハーブを奏でる腕は老人のようにしなびていた。冷静で知的な、海のサファイアのような瞳がココットを射ぬくと、その若君は深々と頭を下げて、ココットにむかってひざまずいた。「わたしは”歌を捧げるもの”ですココット様、あなたにお会いしたかった」「ちょっと待って」「はい」「なんで？」とあたしはもぐもぐとタルタル肉を放り込んだままの状態から、なんとか復帰する。こんな王子様みたいな人がわたしと逢いたいって？なんで？「この方は、ディーセ・アスコルタム。古き都から来た流浪の民。そなたに歌を捧げるために、夜の言葉を捧げるために、この黄昏の都で待っていたのだ」とミリアム。ずっと大人びている。そっか。ここだと時間は流れないからずっと大人...

...なのかな。ミリアムは。わたしよりも。ディーが歌いだした。

旧きとき

旧きとき

わたしは愛を知りました

ココット

あなたという愛を

それは旧き夜の言葉

ココット

あなたという愛の言の葉は

わたしの国を蘇らせるのです

旧きときを

蘇らせて

旧きとき

旧きとき

わたしは愛を知りました

ココット

あなたという愛を

今一度、歌ってください

愛しています

わたしは永久に

と、

と、そこまで告げたところで、男の蒼い髪は力なく垂れ下がり、ハープを奏でる手はだらりと垂れた。崩れ落ちる男をココットが受け止める。「なんで。なんで死んじゃうの?」「いかに、アルファンスに、時をとめる魔法がかかっていようとも、千の時は長すぎた。ココット。君のせいではない」「ココット様……。これを」ディーが差し出したのは、これはわたしの日記帳?でもとても古くなっている。「ふむ。ココット。君の物語ははるか古くまで伝わったのだ。我々、森の民も海の民も、すべて君の歌から生まれたのだ」え? あたしは思う。あたしは12歳の女の子、ココット。あたしが世界を生んだの? あたしはディーに問う。ディーの意識があたしに答

えた。違う。世界とは神が生んだ。我々も知らぬ時の狭間で。しかし、君は夜の言葉によって、わたしたち、古き民を新たに生んだのだ。「さあ、日記帳に夜の言葉を。それから古き夜の言葉を教えよう」ミリアムに促されて、わたしは日記帳にディーの言葉を書いた。崩れ落ちそうな、ディーの日記帳を、そっと開くと、わたしたちの冒険が書き記されている。「疲れているだろうが、古文書の館へと来てもらうよ。ココット」とミリアム。「ねえ、ココット」とわたしは猫のココットにいう。「わたし、可愛いから選ばれたんだよね?」「うーん。どうだろう。もごもご」仕方ない。これはわたしの冒険。行くしかないか。本当に?でも……。わたしは事切れたディーを横たえると、ミリアムのあとを追った。「ルシア。黄金号と、猫たちをお願い」と心配そうにもぞもぞと見ている、少年のルシアと猫のココット、それから、猫の機関士さんたちに告げる。

ここはどこだろう。あたしはココット。シルマリルの町の機関車案内人。と、森の都の、図書館で、わたしは意外な人物に出会った。ミシアだ。

「あなたはミシア?」「いつか出会うのでしょうかね。ココット」そして、ミシアは静かに、微笑んだ。「あなたのことはまだ知りません」「ココット。君の知る彼女は、はるか時の果ての、ミシアかもしれぬ」とミリアム。

そして、猫のココットがいた。幼い顔つき。子猫だ。不思議そうにこちらを見つめている。「この子もわたしを知らないのね。」「そうだ。まるで本に書かれた文字のように、未来のことを知らない」夜の明かりがこちらを照らしている。「明るい星。それが夜の言葉を生んだ」「君たちは夜の言葉を集めないと」ミシアが歌う。わたしは歌うもの古き言葉を守ってまいりましたミシアは続けて。「その言葉は愛を知るとき再び歌われるのです」「愛を知るとき?」「ココット。君は誰が好きなんだい?」「誰って……そんなのレディの秘密です!」でも、あたしは知っている。あたしには歌がないことを。だから世界には古き歌が消えてしまい、ミシアもミリアムも、ルシアもディーのように空しい希望を抱き続けるだろうということ。「ごめん。あたし無理」「ココット」とお姫様だったミリアムが悲しそうにいった。「あたし帰るね。シルマリルの町に」あたしは、森の都の、図書館で出会った、猫のココットに名前をつけた。ココット、と。

数日後の時間のあと、黄金号は出発していく。森の都アルファンスからシルマリルへと向けて。魔法の馬車のような小さな客車には、ミリアム、ルシア、あたしが乗り、客車を、牽引している、小さな機関車には、運転担当の猫のココット、さらにせっせと、ポンプとかを操作して、魔法石をくべている、制服姿の小さな、猫の機関士たちが乗っている。黄金号は野原を走っている。空が青い。あたしは落ち込んでいる。あたしには歌はないから。あたしを乗せて。ルシア……

、ミリアム……。 「気分が優れぬようだな」 ミリアム。 「そうね。 そうだわ」 「君はわたしを救ったではないか」とミリアム。 「なんで？」 「わたしをアルファンスの都に連れていくことで」 「いいえ。 わたしは誰も救っていないわ」 「なぜ」 「あたし……ココットは、シルマリルで、一番惨めな女の子だといわれてきたの」とわたしはいう。 「なぜだかわかる？ わたしは、子供の時に虐待されていたから。 わたしの父は貧乏で、わたしを弄ぶことで、ストレスを解消していたのね……」 殴ったり、蹴ったり、弄んだり。 「だからわたしは自分が普通の女の子だと思うことで、それを耐えようとしてきたの」 だから魔法は使えないの。 魔法の町、シルマリルでも。

「すまない。ココット。君にそんな事情があったとは」とミリアム。 「いいえ。話したらちょっとすっきりしたわ」 「それは嘘だ。ココット。君はディーの死に対して、ショックを受けている」 「ディーに？」 「確かなことはいえない。しかし君には休息が必要だ」 それは、再び歌うために？ 「いいえわたしは主役のお姫様じゃないわ。お姫様も主役もあなた」 「君は、わたしの友情を疑っているのか？」 「違うわよ！ ものには順序や立場ってものがあるってこと！」 「そうだ。ものには順序や立場がある」 「そうじゃないと思うけれど。 ってさっきといってるがちがうわね。ありがと。話したらすっきりしたわ。 そうね。あたしは夜の言葉を集めたい。みんなと出会えたんですもの」 黙っていた、ルシアが言葉を出した。 「冒険続行か？」 「うん」 「元気になったか？」 とミリアム。 「うん。 ありがと。 落ち込んでいたのが、嘘みたい」 そう。物事には順序や立場ってものがある。 あたしたちは海辺の町、モルトニアを目指した。 以前そこで旅をしていた、ルシアが夜の言葉を思い出したのだ。 あたしは今日のことを、日記帳に書いた。 ディーの死を嘆いていること。 あたしの過去のことも……少しだけ。

海辺の町は、「見果ての街」という。 かつて東の国からの使者が訪れた街だ。 「我々、森の一族がタンタル牛を飼っているのはそのときの牛の生き残りが、この地に広がったためだ」 以下そのときの時代のお話はあまり関係のないお話だが、わたしたちがパンのほかにコメを食べようになったのは、オルギン＝ハン大老の影響が大きい。 「牛」 「食べるか？」 そうね。 食べないとなにも、はじまらない。 あたしたちは笑顔になる。 わたしたちは、ヤポ二のコメで作られた、火で炙った、暖かい、ご飯に、タンタル牛の漬け込み肉の照り炙り焼き、炒めた、季節の野菜が乗った、お弁当を食べた。 アルファンスを、出発したときに近くの街の、お弁当屋さんで買ったものだ。 美味しい。 「このお弁当、美味しい！」 「そうだな」 「お肉もらってもいいか？」 とルシア。 「はい。どうぞ」 羨ましそうに、ミリアムがこちらを見た。 「ミリアムも欲しいの？」 「いや、仲が良さそうで、いいなあ、と思った」とミリアム。 ってミリアムなにをいっているのよ！ 「な、ななになによ」 「俺たち、そ、そんな関係じゃないからな」 「わたしもルシアが好きだよ。ココットも、だが」 「ってほら焼き肉あげるから駄々こねないで」 「うん……。 すまない。 なにをいっていたのだ。 私は……」 いつものミリアムに戻ったみたい。 たぶん。 たぶん。 だけど……。 ミリアムもルシアのことが好きなんだと思う。 でもそれを自覚していない。 とあたし

は思った。黄金号が野原を進んでいくと。突然、ルシアが声をあげた。お弁当を食べたまま。

「ちょっと、あっちで、誰か倒れているぞ」

そこに倒れていたのは、見覚えのある、あの女泥棒さん？ 倒れているのは、一人だけみたい。

「どうする」と、わたしたちはそばで、機関車を停車させた。「助けましょう」とあたし。「そうだな」幸い晴天の野原には、誰も行き交うものはいない。「まだ息がある。なにかで撃たれたみたいだ……」腹部に、血が付いている。「くんくん。いい匂い……」と倒れたお姉さんがいう。「誰か助けてくれ」「わたしたちを襲ったりしなければね」「う、うう」気がついていないようだ。助かったという安堵からか再び、気を失う。わたしたちは彼女を客車のなかに運んだ。「狭いな！」普通の馬車サイズしかない黄金号の客車は、あたしたち三人に加えて、大人の女性がのると、狭い空間だ。「いったい。あなたどうしたの？」あたしは彼女の傷口を新鮮な真水で洗い、包帯を巻くとたずねた。

「あたしは、あたしは、裏切られたんだよ。 Gondonesia の兵士に」 Gondonesia？ あたしたちが向かう場所の反対側の大きな島だ。あんまり良くない噂を聞いているけれど。「情報を集めているって噂を聞いて、そこであたしたちは黄金号のことを話した。でも金を受け取った途端、ゼロワンは殺されて、あたしは傷を負いながら、なんとか逃げてきた。そして、ここで気を失った……」

「見て！」とルシアがいう。あたしが進路前方に目を向けると、前方には、兵士たちを乗せた、まがまがしい、超大型の魔法機関車が！ あれは戦闘用の魔法機関車だわ。とあたしはそういった存在があることを思い出した。「大変大変！ 囲まれているよ」と猫のココットがいう。「見たところ、数百名の兵士によって包囲されているな……」ミリアムがラッパ銃を取り出しながら、いう。

それから数週間後、あたしたちは森の国にいた。「それであなたたちはどうやって逃げ出したの？」とミシアが聞いた。「わたしたちが絶体絶命だと思ったときに、ミリアムはある場所へと誘導したのね」「それはどこかしら？」と愉快そうにミシアが質問する。いたずらっぽく。「魔法の機関車でしか入れない場所。地底通路よ」とあたし。「地底通路？」「そう。森の民がはりめぐらせた、地底のトンネルよね」ルシアはミリアムに、教えられたとおりに詠唱魔法を歌い、魔法の機関車を次元の裂け目から、地底のトンネルへと、誘導したのだ。あたしは忘れない。あの通路の、鍾乳洞の道。地底の湖。掘られたトンネルに設置されたレール。「わたしたちはそこで魔法石を補給して、なんとか逃げ切ったのね」とあたしはいった。

ミリアム様は王女に戻っている。今度の一件で、Gondonesia と森の国は決定的に対立することになった。森の国に通じる通路は封鎖され、ミリアムとGondonesia は対立することとなった。

なぜ対立するのか？それは魔法の機関車、黄金号が重要なものだから。あたしはそれを認めたくない。魔法の機関車ってきっと人の幸せのためにあるもの。それをあたしは一番よく知っている。ミリアムがいる。ルシアがいる。猫のココットがいる。猫の機関士さんたちがいる。だからあたしはミリアムを助けたい。そのためには魔法の結界を破る可能性がある、あの戦闘用の魔法の機関車をなんとかしないとイケない。

あたしたちとゴンドネシアは交渉することになった。ゴンドネシアの特殊部隊がこの大陸で活動していることを快く思わない国もいるから。しかし森の国はあのネスの森にはない。時間を封印している森の国は必ずしも、その場所、その時間に留まる必要がないのだ。あたしたちは古代都市のなかにいる。そこで、ディーは蘇ったのだ。

違う。とあたしは説明された。ディーは古き都を支える言葉であり、彼は死ぬことがないのだ。彼が、死ぬと、新しいディーが生まれる。それが.....ルシアだった。北の国で生まれたルシアが変になったのは森の国に戻ってから数日後だった。"歌うもの"となったルシアはディーのような外見となった。しかし彼は若い。若い、古い知識を知るものとなった。と思う。しかし彼は眠ったままだ。あたしのことも忘れていて、なにかとても古い知識と格闘しているようだった。あたしは驚いた。その出来事をミリアムはうまく説明できないようだった。推測だ。と断ったうえで、ミリアムは、ディーの魂を、ルシアは飲み込んだのだ。といった。こうして新しい言葉を作る詩人が生まれる。じゃあルシアはどこにいったの？あの馬鹿で明るいルシアは。

「すまぬ。通常ならば、ディーの魂は、もとの肉体に宿るはずだった。それが森の国が移動したことによって、なにかが変化したらしい」とミリアムがあたしにいった。森の国に、魔法の機関車はいる。ネスの森に突入した、戦闘用の、魔法機関車はあたしたちを探せなかったみたい。そのため、黒い瘴気によって、森を汚染した。森の民を絶滅させることが彼らの目的の一つだから。しかしそのために、反ゴンドネシアの機運も高まっていた。王族の連合軍と森の民の連合軍は、大陸に残留する、ゴンドネシア軍を包囲し、それを全滅させた。ゴンドネシア軍は撤退し、一触即発の睨み合いが続いている。

しかし古い古代都市にいるわたしたちにはそれはあまり関係ない。

「ねえ、ルシアどうなっちゃうのかな？」とあたしは猫のココットにいった。「さあ、それはよく分からないよね」「あたしの冒険は失敗なのかな？」「そうだと思うよ」「どうして失敗したんだろう.....」「くよくよするな。お嬢さん」とあたしに話しかけるものがある。あたしたちが助けた、女泥棒さんだ。名前はディードリッド・ライ。「生きていればなにか、いいことがあるさ。そう信じてやるのが、あたしなりのあんたへの誠意だ。お前さんのこと、あたしはいろいろ

ろあったけれど、好きだよ」「そうだよ。ココット。あまり複雑に考えてはいけない。ルシアはきつともとのルシアに戻るはずさ」と猫のココット。「ココット。君もミリアムもきつと元に戻るはずさ」そのときあたしはだあっと泣き出した。みんなの親切が嬉しかったから。

歌うものよ 君が愛を生きるとき

君が愛を生きるとき

あたしたちは 嘆くことを忘れる

さあ嘆くな 歌うものよ

と女泥棒のディーが歌った。

ぼくの馬車は<黄金号>

ココット 君をつれていくために

ぼくを名づけてくれた 君を素敵な女性にするために

と猫のココットが歌った。

目覚めてください 愛しい人よ

言葉にはならない想い 届いて

とあたしが歌った。

そこにミリアムがやってきた。

君の愛に 毀れたれば ゴンドネシアの暗き闇を 打ち砕きたり

アルファンスの都で歌が鳴り響いた。

わたしたちは愛を知るもの。 ゴンドネシアの暗き闇を 打ち払いたり

その歌は魔法の歌となって、大陸全土に響き渡り、人々を鼓舞しただけではなく、さらに、ゴン

ドネシアの暗き剣をも打ち砕いたのです。

そして再び、旅が始まった。ネスの森は酷く荒れていた。ここが再び豊かな森となるためには、長い年月が必要だろう。目覚めたルシアはここに残る。という。

「俺はもともと、アルファンスで生まれたんだ。けど、幼かったときに、北の町に捨てられたんだ。だから」

「あたしは……もっと遠くが旅したい……」とあたしこと、ココットがいった。

「わたしは森の民の長として、ネスの森、さらに、ゴンドネシアの復興にも責任がある」とミリアム。ゴンドネシアの兵は魔力を失ったことで、戦いに敗れた。

ディーがいった。「あたしは所詮、はぶれもんだしな。君たちの仲間だが、機関車で旅って柄じゃない」

あたしはいった。「じゃあ、あたし行くね……」魔法の機関車、黄金号には魔法石がくべられ、ゆっくりとネスの森、そしてアルファンスの都を、離れていく。「みんなと別れて寂しくなっちゃうね……」とあたしは猫のココットにいった。猫の機関士さんたちも、寂しそうに鳴いている。あたしは客車に戻った。ずいぶん狭くなった。「ってこんなところに毛布が!? ってまさか!」

「すまぬ。ココット。君とわたしは友人だろう」とミニのスカートで剣をまとった、ミリアムが毛布の下に隠れていた。「……でも森の国が……」「なあに森の国は長にでもまかせておけば大丈夫だ」とミリアム。続けて。「俺もいるぜ」とルシア。「おっと、わたしも、だ」とディー。「ルシアにディーも!」と荷物置き場から這い出してきた二人をみていう。「なんで……なんで……よ」「へへへ、びっくり仰天ってやつか?」「みんな……もう馬鹿ばかり……」とあたし。「数年ぐらいみんなと、別の場所にいてもいいんじゃないかな?ってね」「でも、嬉しいんだろ?」とルシア。「うん。あたしは本当に幸せ」そのときふわりと、あたしの日記帳に舞い降りてきた白い羽。それはあたしが愛を取り戻した喜び?「」「」「さあ行きましょう! 黄金号! 歓びの旅へと」」」とあたしたちは告げた。